

聖書:列王記第二13章1～13節

説教:主に願ったので

はじめに

心が暗くなるようなニュースが伝わってくると、いったい将来どうなるのだろうかと不安を覚えます。神が人を愛しておられるという一方で、どうして私たちは苦しむのか。神は何をされているのか。だれもが抱く疑問です。今日はそのことに焦点を当てて考えていきます。

前回までのおさらいです。南王国ユダにある神殿に仕える祭司であったエホヤダは、まだ一歳だったヨアシュをかくまって育てる決心をします。やがて七歳になって、ヨアシュはエホヤダの助けをもらいながらユダの八代目の王となります。そのヨアシュ、若い時は神殿の修理などに大きな功績を残すのですが、エホヤダが亡くなると次第に信仰から離れてしまう。主が預言者を送って警告しても、聞く耳を持たずにかえって処刑してしまう。最期は部下たちからも見放されてしまった。それが前回までの話。今日は、舞台は南ユダ王国から北イスラエルに移ります。

1 エホアハズとヨアシュ

1) エフーの子

1節。「ユダの王アハズヤの子ヨアシュの二十三年に、エフーの子エホアハズがサマリアでイスラエルの王となり、十七年間、王であった。」

エフーは、バアルと呼ばれる異教の神々を礼拝するイゼベルを倒し、バアルの神殿を徹底的に破壊して北イスラエルの王となった信仰者でした。主からも、「あなたはわたしの目にかなったことをよくやり遂げた」というように高く評価された人でもあります。

2) ヤロブアムの罪(列王記第一12章26節以降)

そのエフーの息子エホアハズが代わって王となったときのことです。2節。「彼は主の目に悪であることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を犯し続け、それから離れなかった。」

国家とか政治とか、大きなところではすばらしい業績を残したエフーでしたが、その息子は「主の目に悪であることを」行う。エフーも子育てに関しては弱さがあったようです。

では、具体的にはなにをしたのか。「イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪」と

いうところにヒントがあります。ヤロブアムは北イスラエルの初代の王となった人ですが、彼が王となって最初に直面したのは、国民がどこで礼拝するかという問題でした。これまで礼拝してきた神殿は南ユダ王国の首都エルサレムにあります。けれども国を二つに分けるほど仲違いしてしまったのでエルサレムに行けない。国民はこのことで不満を募らせ、やがて自分を殺すだろう。それを恐れたヤロブアムは、ベテルとダンという二つの町に金の子牛を造り、これからはここで礼拝できると宣言した。国民の不満をなだめる、いわゆる「ガス抜き」です。もちろんこれは律法に違反すること。これがヤロブアムの罪と呼ばれるもので、あのエフーもどんな事情かは分かりませんが、金の子牛には手をつけずそのままにしてしまいます。その結果、エフーの息子エホアハズも、孫のヨアシュも金の子牛を拝んでもなんとも思わなくなっていました。

2 主に願ったので

1) アラムの王

それでどうなったか。3節。「そのため、主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らをアラムの王ハザエル、および、ハザエルの子ベン・ハダドの手に絶えず渡しておられた。」

アラムはイスラエル王国のすぐ北隣で、いまのシリアのあたりになる。そのアラムの王ハザエルとその息子であるベン・ハダドとが二代にわたって争いを仕掛けてきます。町や村を襲い、畑で収穫したばかりの食糧や家畜を奪っていく。それでとうとう人々は自分の住んでいた天幕を捨てて、おそらく洞穴とかそういうところに難民として逃げなければならなくなったのです。

2) 祈りを聞き入れられた

こんなことが続けば当然、国は荒廃し、じょじょに力を失っていきます。エホアハズも悩んだ。それで4節。「しかし、エホアハズが主に願ったので、主はこれを聞き入れられた。アラムの王の虐げによって、イスラエルが虐げられているのをご覧になったからである。」

私たちもかつて、仏壇に手を合わせて先祖にお願いし、神社に行ってお願ひし、小さな祠があれば手を合わせ、とにかくありがたいと思うものに

お願いしていました。実はエホアハズも同じでした。金の子牛やアシェラという偶像を拝んでいたエホアハズが、二進も三進も行かなくなったら、主に願ったと。とにかく聞いてくれる神がいるならどんな神でもよい、ということだったのでしょう。

これを聞いて皆さんはどんな予想をされるのでしょうか。「そんないい加減な信仰で祈っても主は聞いてくれるはずはない。」おそら多くの方はそう思う。ところが、なんと主はエホアハズの祈りを聞き入れられた。びっくりしませんか。主を信じていない人の祈りでも主は聞いてくださるというのなら、信仰は関係ないということになる。毎週礼拝にわざわざ来る必要はなくて、困ったことが起きたときだけ熱心に祈ればよい。そんな話になりかねません。これはどういうことでしょうか。

3) 一人の救う者と与えられた

それだけではありません。5節。「主がイスラエルに一人の救う者と与えられたので、彼らはアラムの支配を脱した。こうしてイスラエル人は以前のよように、自分たちの天幕に住むようになった。」

一人の救う者がどのような人物であったかはわかりません。とにかく主が一人の救う人をイスラエルに送った。ここでまた新たな疑問が湧いてきます。そんなことをするんだったら、初めからアラムが攻めてこないようにしておけばいいではないか。ところが神は、アラムの軍勢を送ってイスラエルを苦しめたと思ったら、今度は信仰があるかどうか分からないような者の祈りを聞く。そうやってイスラエルを救い出す。どうしてこんなまわりくどいことをされるのか。

3 神の救い

1) 怒り

神がなさることにはすべて意味があり、無駄なことなどひとつもないはずです。ここに書かれていることも、一見無駄なこと、まわりくどいことに見えますが、全部意味のあること必要なこととして起きている。

整理しましょう。まず一つ目の疑問から。なぜ主はイスラエルに苦しみを与えるのか。主が怒ったからだとして3節にあります。それは、エホアハズが金の子牛を拝み、国民にも拝むようにと強制して主の目に悪であることを行ったから。それで主は怒った。

「怒る」ということについてですが、このことばを聞いて落ち着かなくなる方もいるかもしれな

い。ある人に激しく怒られて体調を崩したり、学校や職場に行けなくなった、そんなつらい経験をされた方には、怒りと聞けば恐ろしさばかりが先立つでしょう。

神はなぜ怒るのでしょう。このことは夫婦の関係で説明するとわかりやすい。たとえば、妻以外の女性に夫の心が向いていたら、妻はどうなりますか。怒ります。これは問題でしょうか。いいえ、怒るのは当然です。怒らない方が問題です。ということは、怒りには「悪い怒り」と「良い怒り」があるらしいとわかります。パチンコやギャンブルで負けたからむしゃくしゃして怒る。これはよい怒りとは言えない。けれども、人としてやってはいけないことを見たり来たりしたら怒る。これ正しい怒りと言ってよい。神の怒りはこちらです。神は怒るのは、人が罪を犯してどんどん悪い方向に進んでいくから。言い換えれば、私たちに大きな関心があつて、私たちのことが心配だから怒るのです。

2) なぜ苦しみを与えるのか

神がそんなに心配しておられるのなら、なおさら私たちが苦しまないようにするべきではないか。どうして苦しませるようなことをするのか。神だつて、初めからイスラエルを苦しめようとしたのではなかった。預言者を送って何度も警告した。でも彼らは無視した。いや、無視どころか殺してしまった。そこまでされたら、普通はさじを投げてしまいます。ところが神はあきらめません。今度は、イスラエルに苦しみを与えて目を覚まさせようとする。それでアラムの王ハザエル、ベン・ハダドを送ってきた。もし神が人間を愛していないのなら、こんなことはしません。私たちを愛しているから、正しいところに立ち戻って欲しいと願っているから、あえて苦しみを与え、主に戻ってくるようにと招くのです。

3) 罪人の祈りを聞かれる

では、神がどれほどに私たちを愛しておられるのか、それはどこでわかるのか。4節です。「エホアハズが主に願ったので、主はこれを聞き入れられた。アラムの王の虐げによって、イスラエルが虐げられているのをご覧になったからである。」イスラエルが苦しんでいる時、神はどう思われていたか。こんなとき人はよく言います。「身から出たサビ。自業自得だ。」でも神は違う。「イスラエルが虐げられているのを」ずっとご覧になっていた。かわいそうだ。でも悔い改めるまで手を出してはいけない。涙を流しながら耐えていた。だから信

仰があるのかどうかかわからないようなエホアハズが主に願った時、真っ先に飛び出してきて、一人の救う者を与えられるのです。しかしエホアハズも、そして次の王となったヨアシュも、残念ながらそんな神の愛にがわからない。依然として主の目に悪であることを行い続けます。

4) あわれみの神

こんな結果になるのを見ると、神がイスラエルに救いの手を差しのべたのは早すぎた、と思うでしょうか。結局せつかくの思いやりも無駄になってしまった。そんなふうにも見えます。でも神の愛を無駄にしたのはだれですか。神ですか。違います。エホアハズ、ヨアシュです。また私たちもおなじ。神がどれほどに私たちを愛しておられるのか、ほとんどわかっていない。どうして苦しませるのかと文句を言うばかり。

でも今日の所から教えられます。もし私たちが苦しみに遭っているというのなら、それは意味のない苦しみではない。もしかして、私たちが罪を悔いて神に立ち戻るようにと、神が涙を流しながら与えてくださっているのかも知れないのです。それも私たちだけが苦しむものではありません。主ご自身も十字架で苦しんでくださっている。一緒に苦しむ神がおられるのです。

こんな不信仰な私が神に願っていいのか、そんなふうに躊躇される方にはこう言います。「いいのです。主に願ってください。主は待っておられるから。」

私たちがもうこれ以上罪によって苦しんではならない。エホアハズの時代、神が一人の救う人をイスラエルに送ったように、主は私たちにイエス・キリストを送ってくださいました。そこにはだれが行くのでしょうか。りっぱな信仰をもった人ですか。そうではない。どんな信仰でもよい。とにかくこの方のところに来て願いなさい。主は招いてくださいます。